NO.69

蓬左

HÔSA

徳川園 黒門

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

平成十八年一月四日（水）～二月十二日（日）

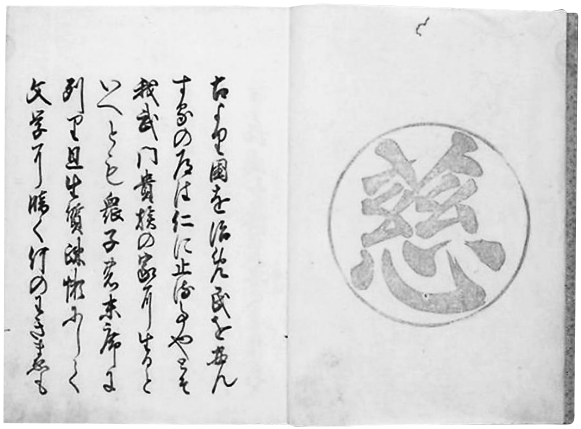
展示室1

殿様と学問

江戸時代の大名は、将軍に仕え、地域の支配者として十分な教養や軍備を備えておく義務がありました。「文武」の道とよばれ、幕府の基本法「武家諸法度」にも大名の責務として明記されています。「文」の中心は儒学を中心とした漢学であり、書や文学、歴史をはじめ芸能まで幅広く身につけ、また武術鍛錬のみならず軍学や科学技術、洋学も取り入れました。

初代藩主徳川義直は林羅山らの儒学者について自らが学び、父の家康から譲られた古典籍をもとに和漢の書籍を蒐集して名古屋城内二の丸に「御文庫」を設けました。現在の蓬左文庫の母体となっています。蒐集書は好学の藩士たちにも貸し出され後々まで利用されました。

天明二年（一七八二）九代藩主宗睦は藩校「明倫堂」を開校して藩士の教育に力を注ぎました。こののち、学制や教科書など教育制度が整備され、多くの優れた学生を生み出したのです。



温知政要　7代藩主宗春著
享保年間（1716-36）刊　1冊

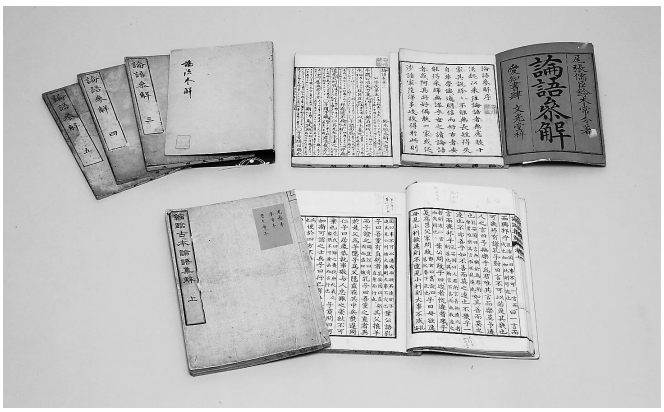
展示室2

杉浦豊治の仕事と蔵書

杉浦豊治氏（一九一六～八六・金城学院短期大学教授）は、蓬左文庫の漢籍（中国・朝鮮の書物）目録の編纂や徳川家康の蔵書である「駿河御譲本」の研究を通して蓬左文庫とは長年にわたって深くかかわっていただいた研究者です。また、杉浦氏の専門は中国哲学で、現在重要文化財に指定されている「論語集解」を大学院の研究のテーマに選んで以来、「論語」を終生の研究テーマとされました。

平成八年、杉浦氏が研究のために収集した一七世紀から一九世紀におよぶ中国および日本で刊行された儒学関係の学術書五千点が蓬左文庫に寄贈されました。昨年、整理を終え、蓬左文庫の新装開館と同時に閲覧室での公開が始まりました。

このたびは、これを記念し、杉浦豊治氏が研究・調査した蓬左文庫の漢籍と寄贈された杉浦氏の蔵書を紹介します。

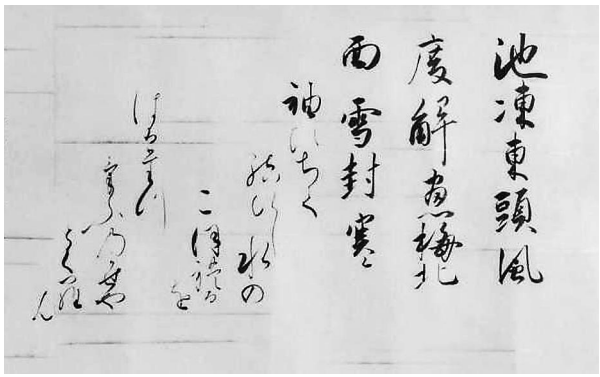


杉浦豊治旧蔵書
上：論語参解　鈴木朖編　5冊
下：論語10巻 2冊

平成十八年二月十五日（水）～四月九日（日）

展示室1
姫君のたしなみ

朗詠詩歌　一巻
普峯院京姫筆　17世紀（徳川美術館蔵）



江戸時代の大名家の姫君たちには、武家の女性としてたしなむべきさまざまな教養がありました。

美しい絵巻や能書による書は教養の糧として親しまれる一方、姫君自身が書画をたしなみ、和歌を詠むことも大切な教養のひとつでした。現在蓬左文庫に伝わる蔵書からは、姫君たちのその地位にふさわしい教養の象徴として調えられた書物の種類や量がいかに豊富であったかが知られます。

また、箏・琵琶などの音曲、貝合せや香合せといった風雅な遊びはもちろん、刀や長刀に代表される武芸も武家の女性には欠くことのできない教養とされました。また、三面とよばれる囲碁・将棋・双六、かるたといった遊技も姫君に必要なたしなみであり、日々のつれづれをすごすための娯楽でもありました。

蓬左文庫に伝来する姫君たちの書物のほか、絵画・音曲・香など、姫君が親しんだたしなみの数々を展示します。

展示室2
近代短歌の世界

歌書の収集・研究家として知られた雑賀重良氏（一九〇〇～八三）の没後、ご遺族から蓬左文庫に寄贈された旧蔵書は、一八、二〇〇点に上ります。とくに、近世・近代の歌集は、著名な歌人の代表作から地方の私家版まで非常に広い範囲に及んでいます。今回の展示は、その中から、近代の著名な歌人の歌集を中心に展示します。

我が国の短歌は、明治維新後も江戸期に引き続き「古今和歌集」を理想として平易な和歌作りをした香川景樹の流れ（桂園派）の隆盛が続きましたが、明治中期に正岡子規らの短歌革新運動が起き、旧来の和歌から近代短歌に変化していきます。

正岡子規の結成した根岸短歌会では伊藤左千夫、長塚節が活躍し、その流れはアララギ派に引き継がれます。大正期には、島木赤彦、斎藤茂吉らが活躍しました。そのほかにも、与謝野晶子、北原白秋らの浪漫主義的な流れ、土岐哀果（善麿）、石川啄木らの、現実生活に目を注いだ生活派の流れなどが注目されます。

こうした近代歌人の歌集の初版本、またはそれに近い古い時期のものは、表紙絵や装丁などに時代を反映した特色が現れており、味わい深いものがあります。

石川啄木著
『一握の砂』明治43年刊（右）と
『悲しき玩具』明治45年刊

展示室1　殿様と学問

「明倫堂」額　1面　寛延2年（1749）　八代藩主宗勝筆　67.7×147.5㎝（徳川美術館蔵）

学問所の開設を願い出た蟹要斎に対して八代藩主宗勝が与えたもの。「明倫」とは、人間関係の秩序を明らかにするという意味である。のちにこの学問所は衰退したが、藩校の開設に際して九代藩主宗睦がこれを下賜し、藩校名が「明倫堂」となった。

論語　天明年間（1781-89）写
一部徳川宗睦筆　2巻

孔子の教えを記した儒教の基本経典。本書は、宗睦が創設した藩校明倫堂にその神体として置かれたもの。一部は宗睦自らの筆になるという。巻子の表紙にあたる部分には、中国では皇帝しか使用できないとされる「五爪の龍」を織りだした布地が使われている。

展示室2　杉浦豊治の仕事と蔵書

論語集解　重要文化財
元応2（1320）年奥書　10冊

中国魏の何晏による『論語』の注釈書。巻末に、元応二年（1320）に豊前国吉田庄（現在福岡県）において教円という人物が写したものであることが記されている。本書は、天明元年（1781）、御文庫に献納された神村忠貞の旧蔵書。箱書きによれば、佐野紹益（1607～91）の所蔵本を安永三年（1774）に忠貞が手に入れたものという。
杉浦豊治氏の代表的な業績のひとつが、本書の校訂と解説『論語集解攷文』である。

会期：平成18年2月15日（水）～4月9日（日）

展示室1　姫君のたしなみ

文正草子絵巻　三巻の内　江戸時代　19世紀　俊教院福君（尾張十一代斉朝夫人）所用（徳川美術館蔵）

塩焼の業で富を得て高位についた文正の出世物語を描いた絵巻である。末尾に「まづまづめでたきことのはじめには、此さうしを御覧じあるべく候」とあり、この物語のもつ祝儀性が強調されている。そのため、正月の読初めの書物として女子に用いられ歓迎された。

万葉集　20冊　江戸時代前期写
本寿院（三代綱誠側室　四代吉通生母）所用

鎌倉時代の僧仙覚の付けた訓みによる『万葉集』。本書は、訓みには平仮名を用い、料紙に、紺色の繊維を漉きこんだ「飛び雲」と呼ばれる紙が使用されるなど、女性の調度として優美さを重視した書物に仕立てられている。

展示室2　近代短歌の世界

『みだれ髪』各種
明治34～昭和48年（1901～73）刊

鳳（与謝野）晶子の第一歌集。明治34年（1901）の初版から昭和48年（1973）までに刊行された36種がそろっている。近代の日本人の間で愛好されたこととともに、雑賀重良氏の同書収集の意欲が感じられる。

「杉浦豊治の仕事と蔵書」展に寄せて

漢籍目録というもの

井上　進

このごろは図書館に行っても、カードや冊子目録を見ることは少なく、ふつうの場合はパソコンで検索ということになるし、ちょっと昔のものとかあまり一般的でない書物などでも、やはり全国横断的なデータベースで検索、となるだろう。だが古い書物、というのは前近代の著作、ヨーロッパ生まれの学問体系に属さない、伝統文化の中で生み出された書物をやや専門的に調べるとなると、冊子目録は相変わらず必須の存在であり、とりわけ漢籍においてはそうである。

古い書物についてはなぜ目録が必要なのか、わけても漢籍の場合は特にそうなのか、そのことを説明する前に、まずなぜ漢籍なのか、どうして昔の中国人が著した書物を、今の日本人が調べなくてはならないのか、ということを少しだけ述べておきたい。

いったい江戸時代までの日本では、学問といえば漢籍を読むのが基本であり大前提であった。そのためわが国には、遣隋遣唐使の時代から、長期にわたって絶えることなく大量の漢籍が輸入され、さらにそれでも需要を満たしきれないため、舶来の原本をもとに伝鈔（転写）がくりかえされ、また日本版、いわゆる和刻本がさかんに刊行された。結果としてわが国には、本国ではすでに失われてしまったものを数多く含む、無数ともいうべき中国版（唐本）、朝鮮版（高麗版、韓本）、および和刻本や鈔本（写本）が今に伝えられているのである。つまり現存する厖大な量の漢籍は、単に中国学の資料としてきわめて貴重というだけでなく、わが国の文化史を考える上でも、決して無視することのできない存在であり、総体として見れば、世界的にも稀な文化遺産を形成しているわけである。

さてかくのごとき意義を有する漢籍も、どこにどんな書物があるのか、またその書物がどんな版本（テキスト、エディション）であるのかが分からなければ使いようがない。そこでいよいよ目録の登場となるわけであるが、古い書物一般の目録ではなく漢籍目録といえば、まず漢籍の特性、わけても国書とどのような相違があるのか、ということを知っておくべきだろう。

漢籍を国書と比較した時、ただちに看て取れる著しい相違は、前者では刊本が圧倒的比重を占めるのに対し、後者では写本の占める割合がかなり高い、ということである。また漢籍の場合、書名や撰者（著者）が分からないものは例外的である一方、国書にはそうしたものも稀ではなく、そもそもそれが書籍（編著書）であるのかどうか、つまり文書とか記録、メモ、ノートの類などでないのかどうかも、すこぶる微妙なものが少なくない。さらに漢籍であれば、ある書物を目録のどこに分類するか、その位置を定めるのにそう大きな苦労はないが、国書には安定した分類体系というものがないため、人によって著録（目録への記載）をいかに行なうかが一定しない。このような違いを生んだゆえん、それはひとことで言えば文化の厚みの差ということになろうが、ともかく両者にはこのような相違があり、それは目録が果たす役割の大小を、いささ

尾張藩御文庫の「御書籍目録」
駿河御譲本を含む初代藩主義直の蔵書目録（右）と
義直没後の蔵書引き渡し目録

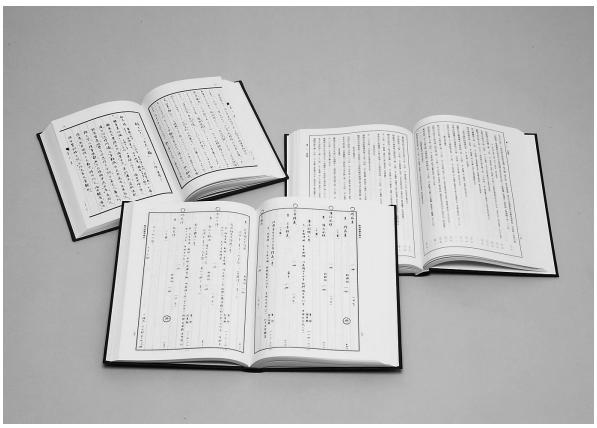
か異なったものとする。

つまり漢籍の場合、ある書物がどういう内容のものなのか、どういうテキストなのかは、たとえその書物なり版本なりを知らなくても、目録を見れば何ほどかの推測が可能となるのに対し、国書の場合はそうした見当をつけるのがより難しい、ということである。逆に言えば、漢籍目録というのはそうした推測が可能となるように作られねばならず、伝統的な分類体系を無視したり、版本の記載がないとか、あっても曖昧、不正確であったりすれば、その価値は漢籍以外の目録にも増して、大きく損なわれることとなろう。

漢籍目録というのは、ある書物が伝統的な学問体系の中で占める位置を示し、また書名、巻数、刊行時期や地点、刊行者などの書誌をできるだけ正確に記載することで、その版本系統を探る手がかりとなるよう作られるべきものであった。こうした目録は、単に検索の用に供されるだけでなく、読まれるべきものでもあり、むしろそちらの方により重要な役割があるのである。そしてこの点から言うなら、編目という行為は「撰」（著）ということばで表現されるべきであり、たとえ自らの思想や主張などを表現する、一般的な意味での著述とは区別されるにせよ、機械的な作業などとは決して同一視できない。

さらに昔の学者、文人の蔵書を受け継いでいるとか、長い歴史を有する文庫の目録などになると、それ自体が文化史のひとこまを反映したものであって、データベースなどでは代替できない、独得の意味を有している。たとえば蓬左文庫の場合、その蔵書は初代尾張藩主徳川義直が、家康より拝領した「駿河御譲本」、および義直によって元和、寛永中に収集された書物を根幹とし、これに歴代藩主ないし尾張藩の集書が加わるわけであるが、このような書籍群の内容をつぶさに伝える目録が、単なる検索用の道具などではなく、より積極的に読まれるべきものであるのは当然だろう。

蓬左文庫の漢籍目録は、故杉浦豊治氏を実質的な編者とするものである。杉浦氏は『公羊疏』や『論語集解』といった、儒教経典の古い注釈を研究しつつ、かたわら当地名古屋の学者、鈴木朖に関する著書をものされ、また蓬左文庫に直接かかわるものとしては、『蓬左文庫典籍叢録・駿河御譲本』の一書を著された学者であるが、文庫の目録がその編著書に含められることはない。これは文庫目の編纂が、文庫当局を名義上の編者として企画、実行されたためであり、そのこと自体に格別怪しむべき点はないだろう。



杉浦豊治氏編『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』（右）
同著『蓬左文庫漢籍叢録』（中央）
同『鈴木朖人と学問』（左上）

ただ名義はどうであれ、この目録が杉浦氏の献身なしには生まれ得なかったものであること、それはやはり忘れられるべきではない。編目という仕事は、むろん考え方にもよるのであるが、昨今さかんに提唱されている業績主義、短期的に目に見える成果を挙げ、世間の耳目を引くことをよしとする風潮から言えば、労多くして功少ない、本当に地味な仕事であり、氏がそうした仕事に多大の努力を払われたことは、まさに「献身」というにふさわしいことだからである。

もっとも私が想像するに、杉浦氏にとってこの仕事は、ひどく骨の折れるものであると同時に、すこぶる楽しいものでもあったろう。宋元版や朝鮮の古版、また本邦の古写古版本、さらに大量の明版を擁する蓬左文庫中に身を置いて、その一々を親しく手に取り、ためつすがめつ眺めるというのは、古い書物を愛する人間からすれば、まったく「百城に南面する」（王侯となって富貴を極める）にまさる喜び、そうに違いないからである。

（名古屋大学文学研究科教授・中国史）

表紙の写真は、平成十六年十二月、正月飾りを終えた徳川園の黒門です。この門を入った正面に徳川美術館、右手に蓬左文庫があり、左手が日本庭園の入り口です。

明治三十三年に完成した尾張徳川家名古屋大曽根邸の正門として建設された総けやき造りの薬医門（四本の柱で屋根を支える形式の門）です。いつのころからか、「黒門」の愛称で呼ばれ、現在ではこちらが正式名称となっています。

大曽根邸表書院で催された尾張万歳（昭和5年6月）
『名古屋市文化財叢書』第53号より転載

当時は、正門（現黒門）を入った正面に徳川邸の玄関があり（現在の徳川美術館正面玄関より黒門寄り）、使者の間から渡り廊下を進んだ先に百畳をこえる広さの豪華な表書院がありました。大曽根邸は、江戸時代の大名屋敷の形態を踏襲しつつ、洋室の設置や写真のような書院に洋風の照明器具を取り付けるなど、随所に洋風の様式を取り入れていました。

昭和六年（一九三一）、徳川邸五四〇坪と敷地八七〇〇坪は名古屋市に寄贈され昭和七年徳川園として市民に開放されました。当時の入園料は、大人が五銭子供一銭で、書院や洋室は、結婚式をはじめ各種宴会に使用されました。

昭和二十年の空襲により、大半の建物が焼失し、現在では、この黒門のほか、管理事務所が使用する脇長屋、蓬左文庫の書庫として使用され、現在は正面玄関となっている什器庫、徳川美術館内の茶室「山の茶屋」だけが、当時の姿を伝えています。

平成十八年の正月は、黒門の前で「尾張万歳」が催されます。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

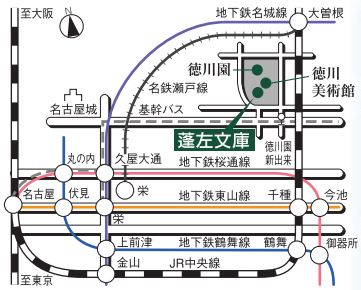
【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）　12月中旬～1月3日　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高校生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第69号　☆平成18年1月4日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※この冊子は再生紙（古紙配合率100%、白色度80%）を使用しています。